



## 体験にこそある

多くの入試現代文の出典となった評論に、社会学者橋本努さんの『ロスト近代』という本がある。戦後の日本社会を、①「近代化」の時代（終戦直後から60年代まで）、②「ポスト近代化」の時代（70年代から90年代中頃まで）、③「ロスト近代化」の時代（90年代中頃から現在にかけて）、という三つに区分した上で、

「近代」とは、人々が生活水準の向上を目ざして、勤勉に働くことが駆動因となっているような社会である。これに対して「ポスト近代」とは、人々が豊かな消費社会を謳歌して、欲望のあくなき増幅が、駆動因となっている時代である。ところが「ロスト近代」においては、もはや勤勉さも消費欲も相対化され、新たに「別のもの」が駆動因となっている。いやもしかすると、私たちの「ロスト近代」社会は、時代を動かす駆動因そのものを失っているのかもしれない。そうだとすれば、「ロスト近代」の社会は、可能性として、どんな駆動因をもちうるのだろうか。

と問題提起し、現代社会を分析していくのであるが、その中に次のような一節がある。

既にカリフォルニア大学のバークリー校では、百人を超える教授の講義が無料動画配信サイトで配信されており、これまでに二百万回以上も視聴されたという。スタンフォード大学やマサチューセッツ工科大学（MIT）も同じように、講義を無料で配信している。MITのオープンコースウェア構想では、講義ノートや課題や講義ビデオなど、ほぼ全てのコンテンツが、オンラインを通じて無料で提供されている。なぜ大学側は、コンテンツ

を無料で提供するのかといえば、それは大学が、情報そのものよりも、教員と直接コミュニケーションすることに価値をおいているからであろう。もちろん学生にとって、大学の卒業証書も、キャリア形成のために重要な役割を果たしている。けれども、大卒資格を得ることの価値は、単に講義を視聴してその内容を学ぶことではなく、教員や周囲の優秀な学生たちとコミュニケーションするという、その体験にこそある。大学が提供する情報そのものは、無料でもかまわない。いや無料だからこそ学生をひきつける、という論理が成り立つのである。（中略）

「ロスト近代」においては、情報が無料になる一方で、本当によいものを消費するという、オーセンティックな（本物志向の）生活が可能になってきた。

\*

動画を視聴するためにお金をかけて予備校に通っている人もいるようだが、それがすでに遅れた経済モデルであることがここに指摘されている（『ロスト近代』が出版されたのは2012年）。もちろん、優れた評論は時代の先をゆくものだし、だからこそ、これが多くの入試問題の出典となったわけだが、アメリカの大学の例などをみると、極めて説得力のある時代分析といえるだろう。

同時に、「単に講義を視聴してその内容を学ぶことではなく、教員や周囲の優秀な学生たちとコミュニケーションするという、その体験にこそある」という指摘は、まさに日比谷での学習体験を指しているといってもイイだろう。もう一度その意味を噛みしめたい。